
媚薬のチカラ

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

媚薬のチカラ

【Nコード】

N8013C

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

割りと普通の高校生活を送っていた武藤樹^{むとういつき}は、ある日佐々倉から貰った飴玉を無防備にも口にしてしまう。それはただの飴玉ではなくノツポが通販で買った媚薬で……。

始まりは最後の日常

薬とは一時的な作用しかなく、その効き目はいつか切れる。

風邪薬然り麻酔薬然り毒薬然り。

どんな薬にも終わりは在って、例外は有り得無い。

だからこの薬から始まった物語にも、きっと例外無く終わりが来るのだろう。

ならば私は、その終わりを見届けよう。

他愛もない世界の

「なあ母さん、メシまだ？ 俺腹減ったんだけど」

「ちよつ、今いい所なんだから邪魔しないでよ！」

「いや、でもさつさと仕度しないと姉ちゃんが料理始めちまうぞ？」

「わつそれはヤバッ。何してるの、早く止めてきなさい！ お母さんもすぐ行くから！」

「あいあい」

え、えつと、な、ならば私はその終わりを見届けよう。

他愛もない世界の片隅の、他愛もない日常の、少しばかり理不尽で傲慢な強制恋物語つ。

はい、語り終了！

その日の朝も、間違いの無い日常の始まりだった。

その日常の端っこで、間違えようのない目覚ましが容赦なく鳴り続ける。

「……………」

目覚ましの主は布団の中でその耐えるには難き拷問に耐え続け、そのうちそれをセットした人間（自分）を恨めしく思い、馬鹿らしくなった所で諦めて恋しき場所を後にした。

それも変わり無き日常で、少年は感慨も無く制服に着替え、朝食

を食べ、登校し駅に向かう。

いつもの風景。いつもの日常。

それが非日常に変わったのは、教室に入ってからだった。

俺が教室に入って直ぐ異変があった。いつものように談笑をしていた女子四人組が、喋るのを止めて俺のことをまじまじと見つめてきたからだ。

「……何だ？」

その視線を軽く流そうかと思ったが、そいつ等から不穏な気配がした為一応訊ねる。

こいつらの考える事は俺に一縷いちるの幸福もくれない事を、俺はこの高校に入学して二ヶ月で学習している。

その牽制けんせいを含めた質問に、慌てて一人の小柄な少女が返してきた。

「え、あつ、おおはよう武藤君。今日はいつもより早いんだね」

「早いつて今日もいつも通りの時間だろ。電車通学だしそうずれる事は無いと思うが。ああ、それとおはよう、紬」

その的外れな返事を言っている少女に、俺は答え返す。嘘のつけない彼女の動揺ぶりから見てもこいつらが俺に何かを隠していることに間違いは無さそうで、とりあえず退避しようと俺は自分の机に向かい鞆を掛けた。と、

「ねえ、樹は甘い物は苦手？」

唐突に、今まで沙良の隣に居た筈（筈！）の勇紀ゆうきが俺の机に乗り出して訊いてきた。ちなみに紬達の居る場所は俺の机から5mほどアレか。瞬間移動か。

「嫌いではないがとりあえずどけ。邪魔だ」

鼻が触れそうなほど顔を近づけて何か期待のこもった瞳で俺を凝視してくるそいつを片手で押し返す。

幼馴染みであるこの草薙勇紀くさなぎゆうきは女のくせに暑苦しい。

とりあえず性格が暑苦しい。人懐こくよく喋るので誰とも仲良く

なるが、毎日聞いていると気が滅入る。

ついでに体格が暑苦しい。俺の五倍ほど飯を食うこいつは新陳代謝が良いのか悪いのか、栄養が上半身の上半分に偏っている。

更にこいつは陸上部で、今は朝練後の朝休み。そのため今の勇紀はまだ茹でっけていて、近づくだけで熱気を感じる。暑苦しさ三倍。

そんな感じで暑苦しい勇紀は何故か他の男子共に人気がある。俺の前席の和人いわく「そこがイイ」のだそうだ。……どこが「イイ」？

そのためコイツと馴れ馴れしくしている（つもりは無いが）と、俺が男子どもの反感を貰うことになる。

こいつが俺に近づくと暑苦しく恨みを買う。その中に俺の安寧は存在しない。

ならばそれは俺にとって損でしかなく、それを避けるためには、この、押しても押しても、迫ってくる、幼馴染みを、押し返さなくちゃいけないんだくそっ……！！！！

「おい、お前達も手伝え。何傍観してんだ」

勇紀消えた四人組は一部始終を楽しげに見ていた。コレはコントじゃねえぞ。特にそのノツポ、何笑いを堪えてやがる。

その中で一人だけ何故か恥ずかしそうに俺達の事を見守っていた
紬は、

「え、あつ、ゆ、勇紀ちゃんっ！」

慌てて俺から勇紀を剥がしてくれた。

「ちよつと沙良^{さくら}、邪魔しないでよー」

勇紀はせつかく手に入れたおもちゃを取り上げられた子供のよう
にむくれる。……いやいや、この比喻は間違えた。それでいくと「
おもちゃ」とは「俺」のことになってしまふ。

「……まあとりあえずサンキュ、紬。助かった」

「えっ、あ、ええと、ど、どういたしましてっ」

紬はまた恥ずかしそうに俯いた。長い前髪で表情がよく見えない。
紬沙良^{つむぎら}はおとなしい。それが俺の認識であり、世界共通の認識で

もある。

詳しいことは俺にも知らない。風の便りをそのまま流すなら、入学当初虐められていた彼女を、勇紀達が助けた。それだけのこと。それ以上は知らないし知る気もない。

だって今、紬は勇紀

達と居てとても楽しそうだ。

「はいはい、そこまで。二人とも、当初の目的を忘れるな？」

そこでやっと、紬達を欠いた傍観者三人が入ってきた。遅えよ。

「佐々倉とノツポは置いて、なぜ蒼井さんまで助けてくれなかったんです？」

「いやあ、たまにはこういうのもいいかなと。ごめんね？」

この中では常人の域に入る蒼井さんは、あははと愉快そうに笑う。その笑いに悪意は無く、蒼井さんの隣で腹を抱えて爆笑してる奴より何倍もいい。

「茜、馬鹿笑いは止せ。そんなものは、後にとっておけ」

この中で一人だけ終始無表情（さっきの傍観時は微かに口の端を歪めていたが）だった佐々倉は、眼鏡のブリッジを軽く押さえながら一声でノツポ（佐々倉の言う茜）を諫めた。

「ちえっ、いいじゃんか、別に減るもんじゃないし」

言いながらノツポは笑いを止める。そこで佐々倉は俺に”あるもの”を掲げた。

「甘いものは嫌いじゃないと言ったな。ならばコレを食べてみる」

俺は佐々倉から”ソレ”を受け取る。透明な包みから覗くソレは、丸くてビー玉程度の大きさ。色は透き通った赤色で、パツと見それは飴玉だった。

「？ 何だよ、コレ？」

「飴玉以外に見えるか？ 見えるなら言ってくれ。まあそもそも食わないというのなら返してくれても構わんが」

眼鏡の向こうの鋭い眼が俺に尋ねる。そうは言われても、受け取ったそれは飴以外の何物にも見えず。

「いや、貰えるなら貰うが。……毒薬とかじゃないだろうな？」

まさかいくらこいつでも致死性のイタズラをしないとは思うが。
……いや、こいつの場合否定しきれない。何せ相手は、あの佐々倉である。

俺は一番嘘をつかなそうな（というかつけない）紬に訊いてみる。
「なあ紬、これ食って死に瀕することが起きたりするか？」

「え、い、いくら鏡さんでもそんな武藤君が死んじやうようなことはしない……です。……少なくとも、それは」

いきなり話をふられた紬は反射的に答える。言葉が尻すぼみなのは多分言いながら紬も確証が無くなってきたからだろう。佐々倉が横目で紬を見て、ノツポがまた笑う。ツボ広いな。

まあしかしそれを訊いて安心した。紬が言うならコレは毒薬ではないのだろう。例え激辛の飴玉だったとしても、辛党の俺なら何とか耐えられる。そう思い俺は飴玉を口に放り込んだ。

「……けど、えつと……」

そこからさらに紬は続けようとしたが、何故かそのまま口を閉ざしてしまった。それ以前に、声が小さ過ぎて俺は聞いていなかった。そこにまま口の中で飴を転がし続ける。

その飴はトロン……と、じんわりした甘さを持っていた。それは一瞬で口内に浸透し、視界をまどろみさせる程だが強烈という言葉は絶対に似合わない甘み。

それをもつと味わうためにそのまま飴を舐めようとすると、

「……………」

「ソレ」は口の中から跡形も無く消え去った。まるで固体がそのまま気化するように、あまりにも不可解な消失。

「？　なあ、コレ一瞬で溶けちまったんだけ、ど……？」

振り返ると、いつの間にか俺の前には紬が他四人に押し出されていた。

「……………」

紬は何故か緊張で固まっていた。その表情は何か俺を心配するような気配も漂っていて、それが俺を不安にさせる。

「……………」と勇紀。

「……………」と蒼井。

「……………」と佐々倉。

「……………」とノッポ。

「……………」どうしたんだ？」と俺。

堪えられなくなり、俺は紬の後ろに隠れている四人に訊いてみる。ちなみに紬は緊張のあまり立ったまま気を失っていた。一体どうしたんだ？

「……………」え？」「……………」

四人は一緒に声を漏らす。それは驚きというより疑問に近かった。「え、樹、なんとも無いの？」

勇紀が不思議な事を聞く。

「どこか異常に見えるのか？」

俺は両手を挙げて何も無い事を表現する。

「ちよつと、じゃあ『あれ』は偽物だったって事！？ 結構高かったのよ！？」

ノッポは悲痛そうな叫びを上げる。

「私は元々信じて無かったけどね」

「私も。紬さん、大丈夫？」

佐々倉は解りきっていたとも言つように眼鏡のブリッジを押さえながら肩を竦め、蒼井は気絶した紬を介抱し始めた。

「……………」

意味が解らず、俺は五人の有様をただただ眺めているだけだった。

瞬間、

「……………」！！！！」

唐突に体が熱くなった。

視界が歪み、意識が朦朧とする。

足の震えは止まらず、体を支えきれず倒れそうになる。

心臓は破裂しそうなくらい脈を打ち、沸騰したような命の源が体

を巡る。

体の感覚が消えかけ、俺の頭の中は真っ白になり

その永遠と感じた一瞬は、ぴたりと止んだ。

「あ」

離れかけた意識が標準を合わせる。

体を確認するがどこにも異常はない。その普通さが、今の感覚を夢の様に感じさせる。

「どうしたの？」

勇紀の心配そうな声に顔を上げる。そして、見てしまった。

「」

俺の前には毎日見ている女子五人。今までと変わり無いそいつらの姿が、

とても可愛く見えるのは、何故だろう。

「!!!!!!??」

俺は飛び退いた。勇紀達の居る壁際から反対方向の壁まで、背中を強打するぐらいの勢いで、全力で勇紀達との間合いを離す。

「…………え？ どうしたの？」

「来るな！ 近寄るな！」

近寄ってくる勇紀を片手を突きつけて制す。その姿を見た勇紀の心配そうな表情が、とても可憐に見えるのは、何故だろう。

「え、どうしたんですか？」

目が覚めた紬、それを抱える蒼井、その隣で変なものを見るような目で俺を見ている佐々倉、果ては何故かこの状況を理解し楽しん

でいる表情のノッポの姿までもが、とても、とても綺麗に見えるのは、何故だろう。

「ほう。つまりコレは、あの『媚薬』が本物だったという確証か？」
佐々倉の言っていることが全く理解できず、そのまま俺は五人に見惚れていた。

始まりは最後の日常（後書き）

始めてみた連載小説。ちゃんと続けられるかもの凄く不安です。

後悔を後に立てず・Aパート

『つまりさっきのは毒薬ではないがノツポが通販で面白半分で購入したあの有名(?)な媚薬であって、その効果を確認するために俺(と紬)を実験台にし、だがしかし効果時間が遅くてお前達はアレが偽者だったと油断し、その時に俺がお前達を見ていて、その所為で効果を発揮した媚薬の力で不本意にも俺はお前達に惚れちゃった、と?』

話の要点をまとめなるべく簡潔にした俺の確認の文章に、確信犯五人は『YES』の一文で答えた。

「……………」

俺は呆れて机に突つ伏す。そのままうなだれ、教室の反対側で恐る恐る俺の様子を窺^{うかが}っている五人を睨^{にら}んだ。この状況でも『あいつら綺麗だなあ』とか思う俺の頭を、今すぐどっかに叩きつけたい。

今は一時限目の国語が終わり休憩時間。あの後すぐにチャイムが鳴り教室に担任が入ってきたことで、違うクラスの佐々倉とノツポは自分の教室に戻ってしまい、俺は説明を訊く時間が無く席に着いた。

入学当初のままの席は男女混合の名前順になっており、どちらかといえば最初の方である蒼井、草薙、紬は武藤の苗字を持つ俺の席とは離れていて、授業中に話を聞くことは出来なかった。

そうして時間が経ち今、俺はこうして机の上でメールを使った会話であいつらに説明を聞いている。席が離れていたのは不幸中の幸いだったのかもしれない。もしあいつらが俺に近付けば、俺はさつきみたいにかしてしまう。

紬や蒼井さん、佐々倉ならまだしも、ノツポや勇紀までもが可愛く見えてしまうというのはどうにも納得がいかない。他が勇紀達をどう見ていようが、俺自身が納得できない。

『……それで、コレを戻す方法はあるんだろうな？ 薬とか方法とか』

俺は一番訊きたい肝心な部分を書き送信ボタンを押す。それさえあればこんな妙なやり取りも終わる。

勇紀の携帯の着信音。勇紀達はそれを開き

「……げ」

とりあえずそれなりに聴力の良い俺の耳が、ノツポのそんな声を聞いたのは間違いだと思いたい。

……間違いだと決め込み、俺はあいつらを信じて確認のメール。持つてる。よな？』

返事が返ってこず、俺は首をあいつらに向ける。俺はノツポを信じているさ？ 信じてるとも。あいつらだつて一応れっきとした高校生だ。ちゃんと後の事を考えられる頭を持っている筈だ。だが。

「ア、アハハ……」

……そんなノツポの空笑い（ああ、ノツポの笑ってる顔もいいなあ）だけで、その状況を理解してしまうのはきつと俺だけじゃない筈。……今一瞬、変なこと思わなかったか、俺。

『……普通、こういうものには解薬を用意するものだと思わないか？』

『いやーなんかこれ面白そうだなってのは思っただけで先のことばあんまり……by 茜』

その返事を見て俺は頭痛になりそうな頭を抱える。どうやらノツポは自分が面白いことしか考えず他のことは気にしない性格のようだ。分かってはいたが。

『ならば昼休みに図書室に置いてあるパソコンでも使って調べる。迅速かつ適切な解決法を探し出せ。まさかそれを買った場所すら覚えていないとか言わないよな。だとしてもネットは無限という名の有限。隠れられる場所はない。なせばなる探せば見つかる。なんとしても今日中に見つけ出して報告しろ。……でないと、分かってる

よな？』

脅威の速さで文字打ち、送信。いつもの絵文字、顔文字は使わない。そんなもの、無駄に圧力プレッシャーを減らすだけだ。

着いた文面メールを見てノッポも理解したのだろう。即行そっこうで帰ってきたメールには『了解、全力で頑張る』と簡潔に記されていた。

「……ハア」

それを見た俺は今更ながらに四月上旬の出来事に感謝してみたりもした。余談であるが俺は生まれながらに目つきが悪い。だからその所為でケンカを売られるのはよくあることで、入学して一ヶ月経っていないその日も、それは繰り返された。

勇紀達との帰り道、すれ違いに目が合う上級生。ソレは立ち止まり、俺の肩を掴む。

目つきが悪いと、やっぱりソレに絡まれる俺。ああ、本当に可哀想な俺。

俺の周りにソレの仲間が群がり、俺を囲む（男女混合だ）。

蒼井さん達が上級生達を止めようとして、勇紀が止める。

それが誰でもない自分達を助けるためだと、蒼井さん達は後で気付く。

無理遣りこじつけられる因縁、浴びせられる罵詈雑言。元々原形を留めていない日本語が混ざり合って、ついに宇宙人と交信できるレベルになった。おめでとうNASA。

めんどくさい（というか地球人である俺はこいつらとは交信はなせない）ので、何も言い返さず黙る俺は、ソイツらにとって格好の獲物でしかない。

ついに弱者に向けて振り上げられた拳は、終ぞつい振り下ろされることとはなかった。

誰だって殴られるのは嫌いで、そんなものは俺も同じだ。

だから、やられる前に、『や』ってやった。

……他人よめの話の聞けば、『ソレ』はまるで台風だったらしい。
剥がれた屋根のように吹き飛ぶ　達。

壁に打ち付けられ動かない人形みたいな　。

性別なんて関係ない。殴り合う気もない　が宙を舞い、『白！』
だの『眼福だ！』などと叫ぶ輩おこもいたそうで。

残ったのは、息も切らず佇む俺ちようほんにん一人。

……『ソレ』はまるで台風だったと、怯えたノツポよそは言っていた。

校内賑わう昼休み。気付いてないのか無意味だと分かっているのか、屋上に出る生徒は一人も居ない。……俺達を除いて。

「なんであいつらから媚薬の話聞いた時に止めてくれなかったんですか。その所為で解薬が見つかるまでは俺こんな感じで過ごさなきゃいけなくなっちゃいますか」

「ホントゴメンね。でもいきなり『私この間通販で媚薬見つけたから買ったんだ！』って高らかに言いながら飴玉（っぽいもの）を見せられても、普通誰も信じないでしょ？」

「……まあ、確かに」

確かにそれは一理ある。『俺ツチノコ見つけたんだ！』と言いなから蛇（らしきもの）を見せられても、信じてもらえないどころか場合によっては病院を紹介されかねない。

「まあこれも君がむやみやたらに人から貰ったものを口に入れてしまった所為だと諦めなさい」

「……まったく、他人事だと思って」

そう言いながらも否定できない事に腹を立てて俺はさっき購買で買ったハムカツサンドを校内設置の自販機で買った炭酸飲料で流し

込んだ。……むせる。

「あ、今やケ食いたね？　だめだよ、炭酸飲料を一気飲みなんて」
その俺の行動を注意するのはさつきから俺の話し相手になってく
れている、あの中では一番普通まともな人である蒼井さんだった。

……いやまあ、確かに『あの中』ではまともな性格・言動なのだ
が、その、見えていない筈の俺の行動を読むのは何とかしてほしい。
屋上は俺と蒼井さん以外いつも誰も居ない。多分それは鍵が開い
ている事を誰も知らないからで、なのにそれを分かっているながら（
もしくは分かっているからこそ）、俺達は階段上の小さなスペース
によじ登り（もちろんハシゴでだが）、こうして隠れて静かな昼食
を摂っている。

ちなみに今日は二人とも、給水塔を背にして反対側を向いている。
理由はまああの薬の所為なわけで。どうやら薬の効果は、相手の顔
を見なければ特に問題ないようだ。媚薬としては欠陥だろ、これ。

「……よく分かりましたね」

と、俺は無意味にさっきのことを訊く。いつもは平気な筈なのだ
が、あの薬の所為か蒼井さんと無言で過ごすのが妙に気まずい。

「そりゃあもう！　ここには私と樹君しか居ない訳だし、暇なとき
はいつも君の行動を觀察みさせてもらってるわけだしね」

……何故だろう。何か今、あまり好ましくない漢字を当てられた
気がする。……気のせいかな。

「……まあこっちとしては楽ですしね。うるさいの（主に勇氣とノ
ツポと佐々倉）はいないし、愚痴も聞いてもらえますし。なにより、
俺はここが気に入ってます」

思ったままを俺は言う。ここでは学校の喧騒も薄れて、本当に同
じ場所なのかと思うほど静かだ。そこでのだんまり空を見ながら過ご
すのは気持ちよく、まるで秘密基地のような自分だけの空間みたい
で落ち着く。だから俺は、そんなことが大好きだ。

他のことは考えていない。自分の平穏を守る為に仕方なく
来ていた前とは違って、今俺はここに居たいから居るのだ。

「……ふーん、なるほど」

と、なぜかその答えに蒼井さんは少し思案するような返事をする。
「俺なんか変なこと言ったか？」

「おっと、そうそう。はい、これいつものです」

ついつい今日のこたごたの所為でいつもの日課を忘れていた。腰元に置いてあったビニール袋からそれを取り出し、蒼井さんに差し出……そうとしたが、直接は渡せないの、給水塔の外回りに沿って、そのアルミ製の筒型容器を転がす。

「あ、ありがとう。ほんと、いつもごめんね」

「別に構いませんよ。毎回俺の愚痴聞いてもらってるんですから、これはその相談料です。俺のけじめみたいなもんなんですから、出来れば受け取っておいてください」

「……最初は思いつきり下心見え見えだったけどね」

「……気付いてたんですか」

もちろん、と笑って、蒼井さんは俺から受け取ったコーヒー缶を開ける。自販機にスラリと並んでる炭酸やスポーツ飲料ではなく、学校で働く職員の為だけに自販機の片隅にひっそりと置かれた缶コーヒー（しかもブラック）だけを飲んでいるのが、同い年の癖に大人っぽくて蒼井さんらしかった。

「樹君ね、結構分かりやすい性格してるよ？　それが分からないのは多分他の皆が鈍いだけだと思うけど。……ああ、でもやっぱり皆分かってはいるのかな。樹君が、そういう人間だって」

ぽつりと蒼井さんが言う。それは独り言のようで、俺には何のこたどかよく分からなかった。

「そういう人間って、俺って一体どんな風に見えてるんですか？　とりあえず俺はそこら辺（主に俺の周りの奴ら）よりはまともな人間を演じてきたつもりですが」

「……………」

と、蒼井さんは黙り込む。……給水塔の反対側に居るから顔は見えないのだが、なんかその、蒼井さんから変な視線的なものを感じ

るのは気のせいだろうか？

「……蒼井さん？」

少し、ほんの少しだけ身を乗り出して給水塔の反対側を見る。別に蒼井さんを確認するだけなのでチラツと見たら顔を戻せばいい。それならばあの薬も反応しない筈だ。多分。

「何してるんですか蒼井さん……ってあれ」

体を擦^{よじ}らせた俺はそのまま周りを見回す。さっきまで話していた蒼井さんが、そこには居なかった。

「樹君」

と、

「な!？」

いつの間にか俺の後ろに、蒼井さんが立っていた。

後悔を後に立てず・Bパート（前書き）

……遅れました。ホントにスイマセンorz

後悔を後に立てず・Bパート

多分俺が反対側を確認した時に、円形である給水塔を逆から回って来たのだろう。というかそもそもこの人は気配を消すのが上手すぎるだろ。蒼井さんに呼ばれるまで、肩が触れそうなくらいの隣に居る事に気が付けないなんて。

……まあしかしそんな事は後々俺が思った事で、今この時、俺はそこまで頭が回っていなかったりもした。

「あ、あが……」

小さな顔が近い。鼻が触れそうなほどに近づいてくる蒼井さんの瞳は大きめで、澄み切った海のように青い。

肩口で切った黒髪は色素が薄いのか紫っぽく、風に流されカーテンのように靡^{なび}く。

そして……身を乗り出すように傾く体を支える為に前に置かれた両腕に挟まれて、いつもは気にならない部分が強調されていたりもした。……そういうところが気になるのも、薬の所為なんだろう。きつと。

「樹君、正直に答えて。……樹君から見て、私はどう見える？」

「どう、と、言われて、も……」

今の俺には『俺がすごく危ないです』としか言いようが無い。全くホントに困る。ここまで真っ直ぐ蒼井さんを見れない（しかもいんな意味で）というのは、結構やばいかもしれない。

「もう、どうしたの？そんな風にしどろもどろしてるなんて、樹君らしくないよ？」

蒼井さんはイタズラっぽく妖艶に笑う（すごくめっちゃめっちゃ綺麗だ）。ってこの人分かっててやってやがる！

「ちょ、は、離れてくださいっ。……な、何かマジでやばそうなんですが……っ！」

「なあに？声が小さくてよく聞こえないんだけど？」

小悪魔みたいに微笑みながらも蒼井さんは真っ直ぐに訊いてくる。その目が今の俺にはとても直視できなくて、必死に全力でグルグル回る頭から、今この場でそれなりに適切な言葉をなんとか引き抜いた。

「あ、蒼井さんハあいつらと比べて力なりまともデ、だからおレモ相談しやすくって、何とイウか、どんな時デモ頼れル先輩みたいな人デスっ……！」

ほとんど片言になりながらも必死で言い切った言葉が押し潰される。

喋った後には他の感情が込み上げて、それが濁流のように押し寄せてくる。

蒼井さんにならまだ許せそうな気もするが、だがしかしやっぱり誇りとかプライドとかみたいなの、けど何か違うそれっぽいものに懸けて女性に真正面から『すごく綺麗です』とか『とても可愛いです』とか『人間界に舞い降りた女神様や』（某宝石箱の人風に）なんて言える筈も無い。（……あ、俺が壊れてる気がする）

蒼井さんかというと、俺の答えを待ちながらニヤニヤ笑っていたが、俺が必死に捻り出した答えを聞くと半眼で俺を睨みながら唇を尖らせて、

「……むー」

と可愛く唸った。やべえ、死ぬ。

「そういう風に顔を真赤にしながらそんなこと言われたら好きな先輩を前に恥ずかしくて言い訳をする後輩みたいなんだけどね。樹君の場合は言ってることの方が真実なんだから困っちゃうよね」

そんな、俺のさっきの脳内を見せたら絶対幻滅されそうな程の過大評価を言いながら俺から離れる蒼井さん。というかその例え、俺の言い訳そのままですよ。

「……でも、私から見た見た武藤君もそんな感じだよ。どんな時でも頼りになる、私の大切な友達の一人」

何故か嬉しそうに蒼井さんは笑う。……いや、それはいいのだが、

わざわざそれを言う為にその”大切な友達”にあんな仕打ちをしたのですか蒼井さん……！

言う事言ったらしい蒼井さんは給水塔の反対側に戻っていく。蒼井さんが視界から消えたところでやっと緊張が解けて、俺はゆっくりと大きな溜息を吐いた。

……マジでヤバイ。こんな事がずっと続いたら、俺が死ぬか壊れるかのどっかになる。絶対。

それもこれもあの飴の所為で、強いて言えばその飴を持ってきた人物の所為でありつまるところ

「……ノツポの野郎絶対許さねえ……」

怨念の類のような声で俺はここにはいないノツポに怒りを込める。アイツの所為でホントに最悪な一日だ。もしこの昼休み中に解決法を見つけてなかったら、最低でもこの屋上から逆さ吊りにしてやるっ……！！！！

俺は拳を思いっきり横振りで給水塔の壁に叩きつける。中に溜まった水で衝撃が反響し、大きな振動となって手元に返ってくる。同時に反対側からきやつ、という小さな悲鳴が聞こえた。

「あ！ す、すいません！ そっち側で蒼井さんが寄りかかっているの忘れてました！」

給水塔越しに謝る。

「うつん、大丈夫。……でもそんなこと言っちゃダメだよ。別にヒムラさんも悪気があってやった訳じゃあないんだから。人間面白そうだと思ったらそっちにフラフラっていつちやうでしょ。それにさつきも言ったけど武藤君も悪いんだし、そもそも樹君が」

「……あの、ちょっといいですか？」

なんかまだまだ続きそうな蒼井さんの説教を遮って、俺は疑問に思った事をきく。

「えっと、……ヒムラって誰ですか？」

「ええ！？ 今更！？」

本当に驚いたように蒼井さんは声をあげる。だがしかし俺の頭

の中にヒムラなんて名前は

「……ほら、ひむらあかね緋斑茜さん。樹君の言ってる……ノッポ、さん」

申し訳なさそうに蒼井さんが言う。……ああ、思い出した。ノッポの苗字・緋斑。無駄にカッコよく難しいからとあだ名を考え、背が高いからということであんなに俺がノッポと勝手に呼んでるんだっけ。

「もう。武藤君ってたまに酷いよね。友達の名前ぐらいちゃんと覚えなきゃ」

「……まあ、頑張ります」

多分本名を呼ぶことなんて無いと思うが。

「それとさっきの事だけど、そもそも武藤君がちゃんとあの飴の事を確認しないのが悪いんだし、こういうことを起こしたくなかったらもっとしっかりするべきだと思うな。大体」

せっかくさっき遮った蒼井さんの説教はまだまだ続く。蒼井さんはたまのスイッチが入るとそうそう止まることはなく、あ、なんか朝礼の校長先生の話の時特有の耐え難い眠気が……。

「武藤君？ちゃんと聞いている？」

「は、はい。ちゃんと聞いてます。俺も悪いのは分かりました。だからもうその話は終わりということ……」

「本当に分かった？もう緋斑さんの事を目の敵にしない？」
「勿論です」

はっはっは。当たり前じゃないですか。そんなまさか、この俺が蒼井さんのありがた〜いお説教を切り上げさせる為に話を合わせてるなんて、そんな、……まさか〜

反対側の蒼井さんは黙ったまま物音一つ立てない。だがしかし給水塔越しに感じる視線は、まるで俺を狩ろうと言わんばかりの、その、言うなれば殺気、のような……。

キンコンカーンコン……

「あ、予鈴ですね。ほら蒼井さん、さっさと戻りましょう！」

俺は昼飯の後片付けを早々に済まし立ち上がる。

「何してるんですか蒼井さん！ 授業に間に合わないと大変ですよ！」

「……へえ、珍しいね。武藤君が授業に間に合うように急ぐなんて俺はまだ座ったままの蒼井さんを横切りその向こうのハシゴに手を掛ける。」

降りるために不可抗力で振り向くと、

一瞬。一瞬だけ、蒼井さんの後ろに黒いオーラが見えた気がした。

……うん、気のせい。きっと。……きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013c/>

媚薬のチカラ

2010年10月9日05時41分発行